

津軽弘前藩の武芸(6)

資料紹介

太田尚充

寺山家所藏武芸関係古文書等(1)

目次

まえがき

古文書目録(稿)一覽

一、起請文、當田流演武高覽控帳、門人帳等

二、當田流太刀(劔術)

三、當田流棒

四、林崎新夢想流居合

五、宝蔵院流十文字鐙

六、小笠原流諸礼

七、馬術

八、劔術

九、弓術

十、その他の武芸文書

十一、書状

十二、冊子本（諸記録等）

十三、小太刀、印章その他の遺品

あとがき

まえがき

本学教養部『文化紀要』第二十四号の拙稿「津軽弘前藩の武芸(5)」の「あとがき」に、「弘前藩における当田流が盛んであり、かつ、それだけ門弟数も多く、その子孫も居られると思うのに、個人所蔵の伝書類に接することのできなかったのは残念であった。散逸していると思われるが、この探索が今後の課題のひとつである。」と書いた。この度、幸運に恵まれ、個人所蔵の、しかも「(当田流)当田流」嫡伝正統にかかわる数多くの伝書等に接し、年来の希望を満たすことができた。ひとえに、所蔵者寺山龍夫氏(寺山 龍夫)（故人、旧姓浅利）夫人・寺山泰子氏のご好意によるものである。

故寺山龍夫氏は、弘前藩の生んだ屈指の武芸者・浅利伊兵衛均(たがよし)禄の後胤に



写真(1) 弘前市武徳殿で当田流太刀の型を演ずる
故寺山龍夫氏（昭和41年3月）

が

あたる。伊兵衛均禄は、弘前藩「當田流太刀（劔術）」「當田流棒」「林崎新夢想流居合」等の初代もしくは流儀継承者であり、故龍夫氏は、これら流儀の継承者として実質上の最後の人であったといつてよい。同時に、流儀に関する伝書類も継承し、他の武芸関係古文書も浅利家に関する古文書、諸記録、遺品等とともに所蔵されていた。そして同氏亡き後は、泰子夫人によってすべて大切に保管され今日に至っていたのである。

昭和六十一年五月六日より、ご当家の願いもありこれらのおびただし数にのぼる古文書等の分類整理に当り、写真撮影・複写等の作業を繰り返して続けた。古文書等の分類整理という作業は、筆者にとって初めての経験であり、この作業の過程で己れの学問的未熟さに悩まされたが、意を決して順次発表していくことにした。

今回は、とくに武芸に関係が深いと思われる古文書等の目録を紹介することにとどめたが、この目録においても今後さらに追加や訂正もあり得ると考え、「目録」にあえて（稿）の一字を加え、「目録（稿）」として発表することにした。

注(1)

「當田流」の読み方について、『文化紀要』第二十四号の拙稿「津輕弘前藩の武芸(5)」では、七〇頁に「とだ」と振り仮名をした。理由は、綿谷雪・山田忠文編『大改訂 武芸流派大事典』(昭五三、東京コピー出版部 六四〇頁に「當田流」に「とだ」と振り仮名をしていること、外他流、戸田流に関係が深いこと、また、笹間良彦著『^四 日本武道辞典』(昭五七・一一、柏書房)五一四―五一六頁における「當田流」に関する諸記述等からの推察による。

しかし、寺山龍夫記『當田流太刀之型・由来・型目録・継承者』(昭四一・三・八)では「とうだ」と読ませているので今回はこれに従った。

(2) 寺山龍夫。浅利八郎均虎の子浅利大重の次男（兄・重雄、弟・健三）として、大正五年六月八日、青森県東津輕郡瀧内村古川の鉄道院官舎（父大重は国鉄職員であった。）で出生。本籍弘前市森町八番地。昭和二十四年八月十六日寺山家養子として入籍。昭和四十九年十月二十六日病没。生前、堀越中学校、石川中学校、弘前市立第一中学校教員（教頭）として

歴任、(昭和四七・三、勸奨退職) 當田流太刀・同流棒、林崎新夢想流居合を関彦四郎について修得する。昭和四十一年三月十日、當田流太刀を青森県無形文化財に申請したが許可にならなかった。墓は弘前市京徳寺にある。

(3) 浅利伊兵衛均祿。浅利五郎左衛門の子として明暦二年（一六五五）出生（逆算推定）。寛文二年（一六七〇）八月家督相続。天和二年（一六八二）八月寄合、二百石。元禄元年（一六八八）十月十五日無調法のため身上召し上げられる。元禄四年（一六九一）四月十六日武者修行のため弘前出立。同年閏八月晦日弘前下着。正徳元年（一七一二）八月再び出仕。享保三年（一七一八）十月二十五日病死。六十二歳。戒名無庵幽生居士。墓は弘前市京徳寺にある。

武芸修行経歴、概ね次の通りである。

- 1、当田流太刀、延宝三年（一六七五）七月二十五日免許、同八年（一六八〇）印可。
 - 2、当田流棒、延宝八年（一六八〇）九月十五日印可。
 - 3、宝蔵院流十文字鑓、天和二年（一六八二）八月十五日印可。
 - 4、小笠原流諸礼、宝永二年（一七〇五）八月印可。
 - 5、石堂竹林流弓術、元禄四年（一六九一）印可。
 - 6、雪荷流弓術、享保二年（一七一七）印可。
 - 7、林崎新夢想流居合、享保元年（一七一六）八月五日印可。
- その他、伊兵衛均祿については、本紀要第二十二号、拙稿「津輕弘前藩の武芸(3)」六一頁の注(1)参照されたい。

古文書等目録（稿）一覽

凡例

- (一) 冊子本、卷子本等の表紙に題簽（箋）あるいは外題があつて表題が明らかの場合には、その題名を「」で示した。
- (二) 「」のない題名は、内容その他から推して仮りにつけたものである。
- (三) 破損や虫害が甚しく、どうしても題名のつけ難い場合には題名不詳とした。
- (四) 体裁によって、卷子本、冊子本、折本、堅紙・折紙・切紙の四種に分類した。卷子本には、表紙や軸の失わ

れているもの、あるいは始めから軸のなかったと思われる巻き紙の様式のものまで含めた。

(五) 古文書・記録等の紙質や縦・横の大きさ等、特別のことがない限り説明は省略した。また、判読不明な文字を□、文中に注の必要な場合は()で示した。

一、起請文、當田流演武高寛控帳、門人帳等

1、當田流起請文

豎紙

元禄六年(一六九三)四月晦日、櫛引伊右衛門より浅利伊兵衛あての起請文。

2、弓術起請文

卷子本

元禄七年(一六九四)二月十一日から正徳二年(一七一二)六月十二日まで十六人の連署による浅利伊兵衛あての起請文。

3、當田流起請文

卷子本

嘉永七年(一八五四)正月、四十八人の連署による浅利万之助あての起請文。

4、當田流(太刀・棒・管鑓)演武高寛の控帳 冊子本(横長)

正徳五年(一七一五)三月六日、浅利伊兵衛が門弟と共に演武したときの控帳。

5、〔當田嫡傳流人数付帳〕

冊子本（横長）

享保十一年（一七二六）八月、浅利万之助が門弟と共に演武したときの控帳。

6、〔當田流劔術・林崎新夢想流居合〕門人帳 冊子本

安永五年（一七七六）から天保十五年（一八四四）に至る門人帳。

7、〔名簿帳〕

冊子本

明治二十七年（一八九四）十一月から明治四十四年（一九一一）に至る當田流入門帳。

8、〔身分明細表〕

冊子本

浅利八郎及び八郎の祖父、父、嗣子、弟等の住所、生年月日等を記載している。「警察本部」の公用紙を使用。

9、〔型名簿〕

冊子本

大正四年（一九一五）十一月の型演武者氏名。

10、〔當田流型名簿〕

冊子本

大正五年（一九一六）十一月の型演武者氏名。

11、「記」

冊子本

大正八年（一九一九）六月六日、浅利八郎による当田流劔術・林崎新夢想流居合の型の名称と保管して
いる傳書目録等の覚書。

12、「定」

切紙

當田流劔術・林崎新夢想流居合の「禁制」に関する覚書。

附「當田流太刀型・由来・型目録・継承者」 冊子本

昭和四十一年（一九六六）三月八日、寺山龍夫による覚書。

二、當田流太刀（劔術）

1、「當田流太刀目録 一」

卷子本

内題は「當田流太刀表目録」。

延宝三年（一六七五）七月廿五日、當田甚五兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。

2、「當田流太刀目録 二」

卷子本

内題は「當田流太刀裏目録」。

延宝三年（一六七五）七月廿五日、當田甚五兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。

3、「當田流太刀目録 三」

卷子本

内題は「當田流太刀中極目録」。

延宝三年（一六七五）七月廿五日、當田甚五兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。

4、「當田流太刀目録 四」

卷子本

内題は「當田流太刀許極意目録」。

延宝三年（一六七五）七月廿五日、當田甚五兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。

5、「當田流太刀許之卷 五」

卷子本

内題は「當田流太刀許極意之卷」。

延宝三年（一六七五）七月廿五日、當田甚五兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。

最後に、享保十九年（一七三四）十一月二十日、一戸三之介宗明より浅利万之助あての「指南之許狀」の添え書きがある。

6、「當田流太刀虎口之卷 六」

卷子本

内題は「虎口之卷」

延宝三年（一六七五）七月廿五日、當田甚五兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。
最後に、享保十九年（一七三四）十一月二十日、一戸三之介宗明より浅利万之助あての「此一卷所授^{ノカル}其身一生之守護也 聊龜相不可取扱者也」の添え書きがある。

7、「當田流太刀許時供物之卷」

卷子本

内題は「當田流太刀許之時備壇上候供物之事」

延宝三年（一六七五）七月十一日、當田甚五兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。

8、「當田流太刀嫡傳之卷」

卷子本

内題は「當田流嫡傳之卷」

延宝八年（一六八〇）九月十五日、當田半兵衛尉吉正の朱印・花押はあるがあて名はない。

9、「當田流太刀印可之卷 一」

卷子本

内題は「返起請文之事」

延宝八年（一六八〇）九月十五日、當田半兵衛の花押（朱印なし）がある。

10、當田流太刀目録六本ノ写

卷子本

表に「當田流太刀目録六本ノ写 門弟へうつさせ候時入用也」との記載がある。目録の書き方を示し、

「宝永二年（一七〇五）八月廿九日の日附がある。「目録六本」とは「表目録一」から「虎口之巻六」までの六巻を指している。浅利伊兵衛が書いたものと思われる。

11、當田流太刀目録 一

卷子本

内容は「當田流太刀表目録、同裏目録、同中極目録、同許極意目録」。

浅利万之助より神茂左衛門あて。期日、朱印・花押がなく、控と思われる。

12、當田流太刀目録 二

卷子本

内容は「當田流太刀許極意之巻、虎口之巻」。

浅利万之助より神茂左衛門あて。期日、朱印・花押がなく、控と思われる。

13、當田流太刀表目録

卷子本

天保九年（一八三八）二月吉日、戸田行左衛門定最より戸田八十八あて。浅利伊兵衛の高弟成田兵右衛門総恒系の伝書である。

14、當田流太刀裏目録

卷子本

内題は「當田流太刀裏目録」。この題名の上に成田兵右衛門総恒の朱印がある。

天保九年（一八三八）二月吉日、戸田行左衛門定最より戸田八十八あて。

15、當田流太刀中極目録

卷子本

内題は「當田流太刀中極目録」。成田兵右衛門総恒の朱印がある。

天保九年（一八三八）二月吉日、戸田行左衛門定最より戸田八十八あて。

16、「當田流劔術私手鑑」

折本

安永七年（一七七八）十月、浅利万之助均豊より永田軍七あて。

17、當田流解説之書

冊子本

安永八年（一七七九）、「藤原豊貫謹書」とあるが、あて名はない。成田兵右衛門総恒、堀口安兵衛尉胤清の系統である。

18、「當田流太刀并居合・棒極位巻」

折本

浅利伊兵衛が浅利万之助均費が書いたものと思われる。日付の記載はない。

三、當田流棒

1、「當田流棒目録 一」

卷子本

内題は「當田流棒表之目録」。

延宝八年（一六八〇）九月十五日、當田半兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。

2、「當田流棒目録 二」

卷子本

内題は「當田流棒裏之目録」。

延宝八年（一六八〇）九月十五日、當田半兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あて。

3、「當田流棒目録 三」

卷子本

内題は「當田流棒極意之巻」

延宝八年（一六八〇）九月十五日、當田半兵衛尉吉正より浅利伊兵衛あての許状。

4、當田流棒目録 一

卷子本

内容は「當田流棒表之巻」。

正徳五年（一七一五）十一月三日、浅利伊兵衛均禄（朱印・花押）とあるが、あて名の部分は切れてい
る。

5、當田流棒目録 一

卷子本

内題は「當田流棒表之目録」。

正徳五年（一七一五）十一月三日、一戸参^{（マツ）}之助宗明より浅利萬之助あて。

6、當田流棒目録 二

卷子本

内題は「當田流棒裏之目録」。

正徳五年（一七一五）十一月三日、あて名の部分が切れているが一戸参之助宗明より浅利萬之助あて。

7、當田流棒目録 三

卷子本

本文の先の部分が切れているが、内容は「當田流棒極意之巻」。

正徳五年（一七一五）十一月三日、一戸参之助宗明より浅利萬之助あて。

8、當田流棒目録 二

卷子本

内容は「當田流棒裏之目録」。

寛保元年（一七四一）左藤伊兵衛より赤田口助あて。伝系は當田甚五兵衛——木村長八長盛——佐藤伊右衛門忠清——乳井武明建明——左藤伊兵衛となっている。

9、當田流棒目録

卷子本

内容は「當田流棒表之目録、同裏之目録、同極意之巻」を一本にまとめたもの。

寛政六年（一七九四）戸田与左衛門より戸田丈之助あて。伝系は當田半兵衛——浅利伊兵衛——斉藤弥五兵衛——戸田茂兵衛——戸田与左衛門となっている。朱印・花押はない。

四、林崎新夢想流居合

1、「居合向之次第 一」

卷子本

内題は「向次第」。常井喜兵衛尉直則より浅利伊兵衛あて。伝系は林崎甚助重信——田宮平兵衛照常——長野無楽斎模露——一宮左太夫昭信——谷小左衛門季正——常井喜兵衛となっている。日付、朱印・花押はない。

2、「居合右身之次第 二」

卷子本

内題は「右身之次第」。以下は右と同じ。

3、「居合左身之次第 三」

卷子本

内題は「左身之次第」。以下は右と同じ。

4、「居合外物次第 四」

卷子本

内題は「外物次第」。以下は右と同じ。

5、「居合外物次第 五」

卷子本

内題は「外物次第」「高上極意之巻」。伝系は右と同じであるが、浅利伊兵衛に続いて浅利万之助均費——

浅利金五郎あてとなっている。日付、朱印・花押はない。

6、「居合秘歌之卷 六」

卷子本

内題は「秘歌之大事」。以下は「向次第」と同じ。

7、「均禄夢想居合 極意之卷」

卷子本

内題は「均禄夢想居合極意之卷」。伝系を書かず、「夢想之年号 延宝八年申曆（一六八〇）九月十一日 浅利伊兵衛均禄（朱印・花押）」と記している。あて名はなく「弟子中募執行 尤人柄可然人身躰（は）可傳授者也」との添え書きがある。

8、極意相傳之卷

卷子本

内容は「極意相傳之卷」。以下は「向之次第」と同じ。

9、居合許印可太刀心持之事

卷子本

内題は「居合許印可太刀心持之事」。日付、伝系、あて名の記載はない。「居合許之書物」として「一、向次第之卷 二、右身卷 三、左身卷 四、外物許卷 五、歌之卷 六、手鑑卷 外 許状（ばかり）是計也」を挙げている。

10、高上極意夢想心鏡 明鑑之巻

巻子本

内題は「高上極意夢想心鏡 明鑑之巻」。

承応三年（一六五四）十二月、常井喜兵衛の記したものとなっているが、その写本である。次のような添え書きがある。

「右者常井喜兵衛夢想之巻 喜兵衛自筆ニテ書記被置候ヲ七戸権右衛門へ相傳被申候 夫々元禄十五年（一七〇二）八月十六日権右衛門妻子衆々松山善之丞へ相傳 権右衛門ハ右同年二月十四日死亡 善之丞及末端棟方嘉兵衛へ相傳 夫々浅利伊兵衛居合ノ印可不残申請ノ書物計ニテ傳授事一圓無之」

11、居合印可十二用之次第

巻子本

内題は「十二用次第」。

享保元年（一七一六）八月五日、棟方嘉兵衛より浅利伊兵衛あて。

12、居合印可五ヶ之次第

巻子本

内題は「五ヶ次第」。

棟方嘉兵衛より浅利伊兵衛あて。日付は「八月五日」とのみ記している。

13、居合印可切刃之次第

巻子本

内題は「切刃次第」。破損が大きい。

棟方嘉兵衛より浅利伊兵衛あて。日付は「八月五日」とのみ記している。

14、居合印可合口之次第

卷子本

内題は「合口次第」。

棟方嘉兵衛より浅利伊兵衛あて。日付は「八月五日」とのみ記している。

15、居合印可高上極意之巻

卷子本

破損が大きいが、内容は「高上極意之巻」。

正徳五年（一七一五）八月五日、棟方嘉兵衛より浅利伊兵衛あて。

16、居合許印可心持之事

卷子本

内題は「居合許印可心持之事」。

正徳五年（一七一五）八月五日、浅利伊兵衛が書いたもの。あて名はない。

17、居合向之次第 一

卷子本

先の部分は切れているが内容は「向之次第」。

浅利伊兵衛より八反田宇右衛門あて。日付、朱印・花押はなく控と思われる。

18、居合右身之次第 二

卷子本

先の部分は切れているが内容は「右身之次第」。

浅利伊兵衛より八反田宇右衛門あて。以下右と同じ。

19、居合左身之次第 三

卷子本

内題は「左身之次第」。

浅利伊兵衛より八反田宇右衛門あて。以下右と同じ。

20、居合外物之次第 四

卷子本

内題は「外物之次第」。

浅利伊兵衛より八反田宇右衛門あて。以下右と同じ。

21、居合外物之次第 五

卷子本

先の部分は切れているが内容は「外物之次第 五」。

浅利伊兵衛より八反田宇右衛門あて。以下右と同じ。

22、極意相傳之卷

卷子本

浅利伊兵衛より八反田宇右衛門あて。以下右と同じ。

23、極意相傳之卷

卷子本

浅利伊兵衛より樋口萬之助あて。日付、朱印・花押はない。

24、居合向之次第 一

卷子本

浅利萬之助均費より西館縫之助あて。日付、朱印・花押はない。

25、居合右身之次第 二

卷子本

浅利萬之助均費より西館縫之助あて。

26、居合左身之次第 三

卷子本

浅利萬之助均費より西館縫之助あて。

27、居合外物之次第 四

卷子本

浅利萬之助均費より西館縫之助あて。

28、居合外物之次第 五

卷子本

浅利萬之助均費より西館縫之助あて。

29、極意相傳之卷

卷子本

浅利萬之助均費より西館縫之助あて。

30、居合外物之次第 五

卷子本

寛保二年（一七四二）十二月吉日、藤田八郎左衛門より成田左次兵衛あて。伝系は浅利伊兵衛——田中惣右衛門治賢——藤田八郎左衛門。

31、題名不詳

卷子本

浅利伊兵衛より樋口弥三郎あて。

32、居合指南許状

堅紙

正徳五_本歲_{乙未}（一七一五）十一月十六日、浅利伊兵衛尉均禄より今弥五郎あて。

33、居合指南許状

堅紙

延享元_{甲子}年（一七四四）四月十五日、浅利万之助均費より佐和市之亟あて。

34、居合指南許状

堅紙

延享四_{丁卯}年（一七四七）四月三日、浅利万之助均費より浅利金五郎あて。

35、 「十二用次第」

卷子本

伝系。林崎甚助重信——田宮平兵衛照常——長野無染斎模露——一宮左太夫照信——谷小左衛門季正——
常井喜兵衛直則——津輕玄蕃殿となつてゐる。日付、朱印・花押はない。

36、 「五ヶ次第」

卷子本

伝系その他、右と同じ。

37、 「切刃次第」

卷子本

伝系その他、右と同じ。

38、 「合口次第」

卷子本

伝系その他、右と同じ。

39、 「外物次第」

卷子本

伝系その他、右と同じ。

目録内容「取違、寄足、寄身、懸蜻蜒、逆手、胸刀、逆頭上」

40、 「外物次第」

卷子本

伝系その他、右と同じ。

目録内容「頂上、切先廻、二方詰、糸車切留、柄取、直刀、大嵐、小嵐、目付抜、鉄放、四方詰、向大脇指、同大脇指、左右大脇指、向立合大脇指、同立合大脇指、下刀」

41、「歌之巻」

卷子本

伝系その他、右と同じ。

42、左身次第

卷子本

浅利万之助均費より佐和市之亟あて。日付、朱印・花押はない。

五、宝蔵院流十文字鍵

1、宝蔵院流名目録

卷子本

延宝四年（一六七六）九月十五日、高田儀兵衛尉正茂より浅利伊兵衛あて。

2、宝蔵院流十文字鍵

卷子本

延宝五年（一六七七）七月吉日、高田儀兵衛正茂より浅利伊兵衛あて。

3、「宝蔵院流十文字鑑許卷三」

卷子本

天和二年（一六八二）八月十五日、高田儀兵衛より浅利伊兵衛あて。

4、「宝蔵院流紅之書」

卷子本

元禄十四年（一七〇二）十一月吉日、櫻庭又右衛門成美より浅利伊兵衛あて。

5、宝蔵院流印可之書

卷子本

宝永元年（一七〇四）十二月十三日、櫻庭又右衛門成美より浅利伊兵衛あて。

6、宝蔵院流名目録

卷子本

浅利伊兵衛より樋口弥三郎あて。日付はないが次の添え書きがある。

「年号月日 書判 朱印 是ハ歌之書ハ一年も半年も凡而はやくすべし 弟子成月日ニしてもよし 二二
巻ともニ仕合ニ入よし 出すべし」

7、宝蔵院流許卷

卷子本

延享四年（一七四七）、高（ママ）二三之介宗明より岩渕千治郎あて。

8、「宝蔵院流許卷」

卷子本

宝暦四年（一七五四）九月吉日、佐野吉郎兵衛正辰より浅利万之助あて。

9、宝蔵院流十文字鐘

卷子本

伝書というより解説の書。「享保二年（一七一四）八月吉祥日 記之」とあるが、氏名の記載はない。

10、題名不詳

卷子本

慶安四年（一六五一）二月九日、高田平右衛門正重より唐牛兵九郎あて。尽心流槍術または宝蔵院流十文字鐘と思われる。和歌三首がある。

六、小笠原流諸礼

1、「幕一流之書」

卷子本

延宝三年（一六七五）卯月吉日、横山嘉右衛門武基より浅利伊兵衛あて。

伝系 小笠原大膳太夫長時——同右近太夫貞慶——小池甚之亟貞成——岩間七兵衛玄之——廣瀬三左衛門吉教——三好五郎左衛門貞成——横山嘉右衛門武基。

2、「膳方百ヶ條許之目錄」

卷子本

3、題名不詳

御膳の図がある。

卷子本

4、題名不詳

矢の図がある。

卷子本

5、題名不詳

脚当等具足の図がある。

卷子本

6、題名不詳

幕の図がある。

卷子本

7、題名不詳

虫害が甚しく判読困難。

卷子本

8、題名不詳

虫害が甚しく判読困難。

卷子本

9、題名不詳

卷子本

虫害が甚しく判読困難。

10、題名不詳

卷子本

箴の図がある。

11、題名不詳。

卷子本

虫害が甚しく判読困難。

12、題名不詳

卷子本

鷹の図がある。

13、「表威掟之書」

卷子本

元禄五年（一六九二）十二月吉祥日、横山嘉右衛門武基より浅利伊兵衛あて。（この書は「當田流太刀」の傳書のひとつとなっている。）

14、「誕生墓目之巻」

卷子本

元禄五年（一六九二）十二月吉祥日、横山嘉右衛門武基より浅利伊兵衛あて。

15、當家鞆箭之次第

卷子本

宝永二年（二七〇五）八月吉日、横山嘉右衛門武基より浅利伊兵衛あて。

16、題名不詳

卷子本

右と同じ。

17、「書札之卷」

卷子本

延宝三年（二六七五）四月吉日、横山嘉右衛門武基より浅利伊兵衛あて。

18、題名不詳

卷子本

右と同じ。

^{（左）}
指物の竿の図がある。

19、題名不詳

卷子本

右と同じ。

水師之棚、棚置物、衣桁之次第、貝桶之次第の内題がある。

七、馬術

1、人見流馬術曲躰馬之次第 一疋書

卷子本

寛文十二年（一六七二）、小野寺弥五左衛門による。ただし朱印・花押はなく、あて名も記されていない。

伝系 常陸国住人見態之助宗次——出羽国住瀧六右衛門親定——三浦国住小嶋孫右衛門吉久——三浦国住天野甚兵衛重利——武蔵国住山岡三左衛門景成——小野寺弥五左衛門。以下216まで同じ。

2、人見流馬術一二三疋書

卷子本

3、人見流馬術曲躰馬之次第

卷子本

4、人見流馬術三躰四血五生之書

卷子本

5、人見流馬術曲躰破之次第

卷子本

6、人見流馬術「四 無明之巻」

卷子本

7、題名不詳（人見流）

卷子本

8、「飯鋼流軍馬 上」

卷子本

寛文五年（一六五五）九月吉日、長牛新左衛門正忠より唐牛八郎左衛門あて。

八、劔術

1、新影次源流目録^{〔前〕}

卷子本

寛文十三年（一六七三）十月十一日（九月二十一日に延宝と改元）川村次右衛門勝久より浅利瀬兵衛あて。^{〔前〕}

2、新影次源流許状^{〔前〕}

卷子本

延宝二年（一六七四）九月吉日、河村次右衛門勝久より浅利瀬兵衛あて。

伝系 橋内膳正家久——青柳久馬之介高久——河村次右衛門勝久。

3、一心十刀流

折本

寛政六年（一七九四）正月吉日、館山喜八郎倫利より永田左十郎あて。

伝系 庭遊軒可楽貞俊^{〔添出次左衛門〕}——梅生軒可楽貞和——添田理兵衛貞吉——添田定兵衛貞光——兼平理左衛門盛

庸——唐牛甚右衛門宣椅——館山喜八郎倫利。

4、「一心十刀流尺十刀秘傳記」

冊子本

日付、著者の記載はない。技の解説書。最後に「永田藏書印」がある。

5、「一貫流極意之卷」

卷子本

寛文八年（一六六八）十二月吉辰。伝系、氏名の記載はない。

6、一貫流劔術

堅紙

外題に「一貫流奥之卷」とあるが、前半の一部で、日付、伝系等の記載はない。

7、清浄霊剣之傳

卷子本

宝永七年（一七一〇）五月廿六日、小倉勝左衛門勝福より鈴木吉良左衛門あて。

8、一刀流之傳

卷子本

宝曆九年（一七五九）三月十五日、成田保治郎定経とあるが、あて名の記載はない。

9、流名不詳（居合）

卷子本

文化十^癸四（二八一三）七月吉日、今八郎治寛衆とあるが、あて名の部分が切れている。

九、弓術

1、目錄外之物百ヶ條

卷子本

元禄四年（二六九二）三月十一日、石堂竹林之家星野勘左衛門——太田十右衛門興親より浅利伊兵衛あて。

2、雪荷流弓術之傳

卷子本

享保二年（二七一七）十二月、西館頂恵建雄より浅利伊兵衛あて。

3、石堂竹林流「初勘之巻」

卷子本

宝暦二年（二七五二）斉藤新五兵衛喜儒より八木橋左太夫あて。

4、題名不詳

卷子本

元禄七年（二六九四）五月吉日、斉藤角左衛門より八反田孫太郎あて。

十、その他の武芸文書

1、「中輪流棒許極意之巻」

卷子本

元文三年（一七三八）十二月吉日、田中弥兵衛治賢とあるが、あて名の記載はない。

2、薙刀

卷子本

文字なく型を示す人物画のみ。日付、伝系等の記載はない。

3、兵法虎之巻

卷子本

日付、伝系等の記載はない。

4、「記」

卷子本

巻頭に「青森県警察教習所之印」がある。棒、太刀の型を示す人物画がある。

5、阿蘭陀流膏藥製法術

卷子本

享保十四年（一七二九）曾野玄養忠榮より白取金蔵あて。

十一、書状

1、浅利半左衛門、浅利弥太右衛門の両名により浅利五郎左衛門あて。(六月三日)(浅利五郎左衛門は浅利伊兵衛の父)

2、浅利五郎左衛門忠重より浅利伊兵衛あて。(五月十七日)

3、浅利五郎左衛門忠重より浅利伊兵衛あて。(五月廿九日)

4、浅利五郎左衛門忠重より浅利伊兵衛あて。(九月朔日)

5、浅利五郎左衛門忠重より浅利伊兵衛あて。(九月十六日)

6、瀧川主水より浅利伊兵衛あて。(九月二日)

7、吉村留兵衛より浅利伊兵衛あて。(七月二日)

8、吉村留兵衛より浅利伊兵衛あて。(霜月三日)

- 9、差出人不詳、浅利伊兵衛あて。(六月廿二日)
- 10、差出人不詳、浅利伊兵衛あて。(六月十日)
- 11、差出人不詳、浅利伊兵衛あて。(十二月八日)
- 12、浅利伊兵衛より山勝右衛門あて。(六月十六日、控)
- 13、浅利伊兵衛より田長九郎あて。(十一月八日)
- 14、浅利勘太夫より浅利万之助あて。(五月十八日)
- 15、山野十左衛門より浅利万之助あて。(五月廿一日)
- 16、三橋治左衛門より浅利万之助あて。(八月廿九日)
- 17、浅利鉄藏の父の書状(控)あて名不詳。

- 18、あて名は浅利と判読できるが名前の部分は切れて不明。差出人も不明。
- 19、津軽越中守より津軽左門あて。(九月十六日)
- 20、小倉^口左衛門より津軽越中守あて。(二月五日)
- 21、津軽大蔵より津軽平十郎あて。
- 22、浅利万之助均致より工藤伝兵衛他三名あて。(十二月廿七日)
- 23、書状(推薦状)の書き方を示す原稿。
- 24、書状の包紙
浅利伊兵衛尉均禄より小笠原幸右衛門尉あて二枚。
- 25、浅利伊兵衛あて。断片
- 26、浅利萬之助より軍勢(政)局長あて。(寛)(四月朔日)

27、浅利萬之助より軍政局御用懸あて。(寛)(八月)

28、浅利萬之助より北藏人^(ママ)あて。(六月四日)

29、浅利萬之助より岩主悦^(ママ)あて。(寛)(七月七日)

30、浅利萬之助より、後半切れてあて名は不詳。
隊中病入ニ付登城同之儀

31、成田勘兵衛より浅利万之介あて。(六月六日)

32、成田勘兵衛より浅利万之助あて。(六月八日)

33、市川千代介より軍政局評定方あて。(七月)
浅利萬之助門弟教授役

34、教授司より浅利萬之助あて。(九月十九日)

35、武田元之助より浅利萬之助あて。(七月廿四日)

36、武田（元之助）より浅利（萬之助）あて。（九月二日）

37、^{一番手}参四郎より浅利萬之助あて。（三月廿三日）

38、^{一番手}参四郎より浅利萬之助あて。（三月晦日）

39、参四郎より浅利萬之助あて。（四月一日）

40、^{一番手}輜重方より浅利萬之助あて。（四月朔日）

41、三浦治郎右衛門より浅利萬之助あて。（六月十八日）

42、^{当番}締方より萬之助あて。（六月八日）

43、ロロ三右衛門より浅利万之助あて。（七月廿日）

44、藤田清也より浅利萬之助あて。（八月廿一日）

45、寛、鍛冶町 善四郎（九月）

46、舌代、伊東_{ロロ}より浅利金五郎あて。（水無月十日）

十二、冊子本（諸記録等）

1、浅利萬之助「御用留」

自筆

元治二年（一八六五）正月より「京都御供付 萬之助心得」
（均致）

2、浅利萬之助（均致）「撰拳状并履歴書」

自筆

3、浅利鉄蔵「唐牛堅次郎由緒書（控）」

自筆

4、「奇兵隊并大小炮隊被仰付候一件」

筆写本

慶応元年（一八六五）七月十二日、相馬作左衛門より佐藤源太左衛門あての書を筆写したものである。

5、「微行秘書 全」

筆写本

「慶応四（一八六八）十一月（九月八日、明治と改元）源均廣主」とあるが筆写本。

6、「津輕御先祖記」

筆写本

7、「古往萬徳集拔書」

筆写本

浅利伊兵衛の關係部分の抜き書き。「あさりた^{〔均致〕}たむね」の署名がある。

8、浅利伊兵衛拔書集

「古往万徳集」「高照宮御遺鑑」「古老遺譚卷三」「浅利万之助由緒書」「奥不二物語」「浅利伊兵衛遺書」「貞享規範録」から浅利伊兵衛に関する記録の抜き書き。

9、「剣術心法神妙録」

筆写本

文化六年（一八〇九）二月、戸田茂太夫が書き写したもの。原典は、僧沢庵宗彭が柳生宗矩に書き与えたという『不動智神妙録』。

10、「軍用記 完」

筆写本

伊勢貞丈原著による同名の書の筆写本。

11、「藩銘録^{〔庚午〕}全」

筆写本

明治三^{〔庚午〕}年（一八七〇）初春、阿左里氏^{〔あさり〕}との署名がある。

12、「家督相続後之宣言」(控) 扣へ」

筆写本

大正八年(一九一九)三月、小田桐友太郎誌との署名がある。浅利大重の妻ひさは小田桐家の出である。

13、「御鷹野勤書」

筆写本

「老楓軒」の署名がある。

十三、印章その他の遺品

1、朱印

当田流第五代 當田半兵衛吉正の朱印一個

当田流第八代 浅利萬之助均費の朱印一個

当田流第十代 浅利萬之助均豊の朱印一個

当田流第十二代 浅利萬之助均致の朱印一個

2、花押 二個

3、浅利伊兵衛均禄使用といわれる小太刀(木刀)

長さ(全)四三・五センチメートル、重さ約一五〇グラム。

柄の部分一二・五センチメートル

刃の部分三一・〇センチメートル

4、篠籠手 左右一組

肩の部分に三・二×二・六センチメートルの鉄板十五枚、上腕に幅六・〇×長さ一五・〇センチメートルの鉄板三枚、前腕に幅下の部分四・〇センチメートル、上の部分六・〇センチメートルの鉄板三枚、手の甲第二関節まで鉄板、他は鎖で掩っている。但し内側は厚布（裏布あり）で紐でしぼるようになってい
る。「安政六己未年（一八五九）八月吉日、合浦外ヶ濱砂鐵ヲ以 弘前住 紀宗賢作之」と銘がある。

あとがき

昭和六十一年五月六日から武芸関係の古文書や諸記録・遺品等（以後これら一括して資料と云う）を中心として目録カードを作り、写真に収めながら整理分類を進めてきた。その目録カードも二百十枚を超え、写真撮影も千コマ近くなった頃、漸く目録の作成とその紹介の目安ができるようになった。

資料を解説し、その武芸史上の意義や内容等についての検討と論義は今後の課題であるので、ここでの詳しい言及は避けるが、資料を量的にみた場合、最も多かったのは当然のことながら当田流太刀・同流棒、林崎新夢想流居合等武芸流儀に関する資料であった。これは、浅利伊兵衛均禄をはじめとして故龍夫氏に至るまで同家伝統の流儀であったからである。次に多かったのは、故龍夫氏の曾祖父に当る浅利萬之助均致（ただむね）の、藩士として勤務に関する資料であった。

これらの資料の一部は今回の目録にもあるが、多くは載せなかった。武芸とは直接関係がなかったと思われるからである。しかし「あとがき」としてせめてこの人物の一端など紹介しておきたいと思う。

萬之助均致（文政七年十一月七日——明治二十四年二月十七日）^(二八四)^(二八九)は、幕末から維新を経て明治に至る、いわば日本の激動期に、一地方武士としてその生涯を送った人物である。

同家伝来の当田流太刀、林崎新夢想流居合の師範は、弘化元年（一八四四）二十歳の時からであったが、この小藩でもそうであったように、師範は道場で子弟を指導だけしておればよいというのではなかった。（馬廻組二百石）安政四年（一八五七）二月に深浦奉行として赴任、当時の深浦港に出入する商人相手の様々な資料が多数残っていて、煩さな業務に携わっていたことが推察される。これらの資料は、この目録（稿）に載せていない。文久二年（一八六三）、日本の非常事態はいよいよ急を告げる時期であったが、弘前藩でも実戦のための武芸奨励にのり出し、萬之助均致は青森奉行を兼ね、藩の「武芸取締り方取扱い」として藩士の鍛練に当たっている。また、元治二年（一八六五）一月に、藩主承昭が京都御所南門の警備を受命したとき、遠く京都に出張し、約一ヶ月間の短い期間ではあったが奇兵隊頭として活躍した。（自筆による『御用留』がある）この時も苦勞したと思われるが、最も辛酸をなめたのは「戊辰」に入ってからではなかったかと思う。

即ち、明治元年（一八六八）五月、大間越口固め的小隊長として士卒を引率して出張、同年八月には秋田表へ、同年九月には南部表（野辺地）^(二九)へと出張している。さらに、明治二年（一八六九）三月には北海道へ都谷森甚弥大隊の小隊長として出征、とくに同年四月二十四日の函館二股での戦斗（函館戦争）では、自分の小隊から四名の負傷者を出すという激戦を経験した。^(三〇)（この時の戦況は自筆の『撰拳状并履歴書』の後半に詳しい。）当時の自筆の一節にいわく「此ノ時賊臺場ヨリ援砲スルコト実ニ弾丸飛シテ雨ノ如シ。討合ヒ既ニ一昼夜ニ及ビ、隊中彈藥正ニ尽果ントス。

時ニ大斥候坂本友弥駈来リテ隊ヲ助ケテ彈藥ヲ運ブ。凡ソ此ノ時ノ發彈六千六百發余、午後六時ニ及ヒ、福山氏藩兵ト代戦——以下略」。同年五月二十七日、無事弘前に帰っている。この期間の連絡用と思われる紙片が数多く残っているが、これを武芸文書として取り扱うべきかどうか迷うところである。同年十二月二十五日、とくに二股での戦いの功績に対する褒賞として金五十円が贈られている。

浅利家では、伊兵衛均禄以来、文書の伝系によれば萬之助均費（均定とも）、清蔵均緒、萬之助均豊、清蔵均繁、萬之助均致、八郎均虎と代々当田流太刀・同流棒、林崎新夢想流居合の師範として藩士門弟の指導に当たったが、実戦の場に臨んだのは萬之助均致ただ一人であったと思う。とかくすれば、一人対一人、あるいは一人で一度に数人を相手として稽古すれば事足りる道場武芸者と異なり、彼こそが生死を賭して戦場を駆けめくった武芸者ということができよう。しかし、その時の心境を記した資料は見当らない。

その後、明治三年（一八七〇）四



写真(2) 明治二十四年二月十七日、浅利先生（萬之助均致）墓。
弘前市西茂森町、龍負山京徳寺、昭和59年11月1日撮影。

月、弘前藩軍務局監察を勤めたが、同年十一月には旧藩主承昭の命によって家扶となり高照神社の宮番をしている。これは承昭の信頼が厚かったからと思う。また岩木山神社にも出仕（神官、明治十五年八一八八二〇）しているが、当時の仕事ぶりを示す数通の「祝詞」類が残っている。明治二十四年一月二十八日遂に病に倒れ、看病も苦しく、親族、門弟に見守られながら、二月十七日朝、六十八歳の生涯を終える。

師を慕う門弟たちは、墓を建設すべく募金運動をし、出来上ったのが弘前市京徳寺の「明治二十四年二月十七日、浅利先生墓」である。募金運動した際の「建碑義金差出候人名、礼状」の「覚書（控）」が残っている。^{注(4)}これによれば参加者は二十八名、金額は「拾弍円七拾銭」であった。発起人は「佐田大之丞、千葉胤任、乳井和助、伊藤祐勝」の四名で、「礼状」は浅利八郎及びこの四名の名で書かれている。

以上、萬之助均致にかかわる多くの資料を「目録（稿）」に載せることができなかったので、ここに生きざまの一端を記して「あとがき」とする次第である。

注(1) 弘前市立図書館所蔵の『弘前藩庁日記』文久二年二月二十四日の記録参照。また同所蔵の『御自筆之写』（GK—289—3）がある。要は、とかく武芸稽古は流儀にこだわる傾向が強いが「家中之面々流儀に不拘面仕合稽古致候様」とあるように、こだわを取り除き、実戦に役立つ武芸稽古の奨励である。

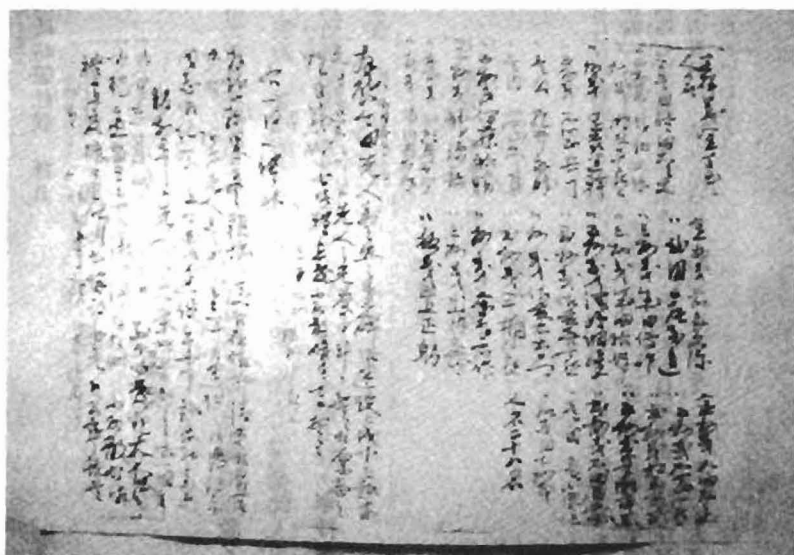
(2)、(3) 当時の藩内の事情及び奥羽各藩の事情や動向については、『弘前市史・藩政編』（弘前市史編纂委員会編、昭四八・一一、名著出版）の「奥羽列藩同盟と藩論」「亟館戦争」の項（八二五—八三四頁）に詳しいので参照されたい。

(4) 「建碑義金差出候人名」^{写(3)}

金弍円 佐田大之丞
 弍式拾銭 竹内 久弥
 拾銭 榊 友三郎

金拾銭	黒森 建幹
五拾銭	石岡 兵司
壹円	乳井 和助
壹円	石岡久之進
五拾銭	伊藤 祐勝
三拾銭	神 源治
貳拾銭	山形典五郎
拾銭	市川吉太郎
拾銭	奈良 文弥
貳円	長尾 義連
三拾銭	成田 傳作
三拾銭	成田 裕好
五拾銭	津軽 綱壁
貳拾銭	佐藤喜一郎
貳拾銭	今 楯九郎
拾銭	奈良 忠作
三拾銭	小山内久蔵
拾銭	三上 正躬
金拾銭	太田辰之丈
五拾銭	石岡 八郎
貳拾銭	相馬寅之進
五拾銭	高瀬道之進
貳拾銭	石岡 西蔵
壹円	千葉 胤任
拾壹円七拾銭	

人名 二十八名



写真(3) 「建碑義金差出候人名」及び「礼状」控

拝啓 陳者御同志御申合せ
今回先人萬之助之墓碑御建設と成下相趣家元より通知有之候 先人之光榮申斗リ無之候

御厚志之程奉感謝候 右御禮申上度 不取敢略筆仕候 拜具

八月 日

(當時警察官として七戸警察署に勤務)
在任地 浅利 八郎

右一同へ禮状

拜啓 残暑為入之難堪候處 各位倍御情光被為在奉恭賀候 陳者先人萬之助之墓碑御建設之御発

現(被)ヒ下 同志御糺合之上今回御建設と成下候趣 委細家元ヨリ報知有之候 先人之光榮此上モ無之

候 御一同之御厚志感謝之至ニ御座候 別而御發現大人方之御配慮啻ナラサル儀ト深ク奉拝謝候

(よりあえず)
不取敢右御禮申上度略筆仕リ 書翰 口 光候

早卒 頓首

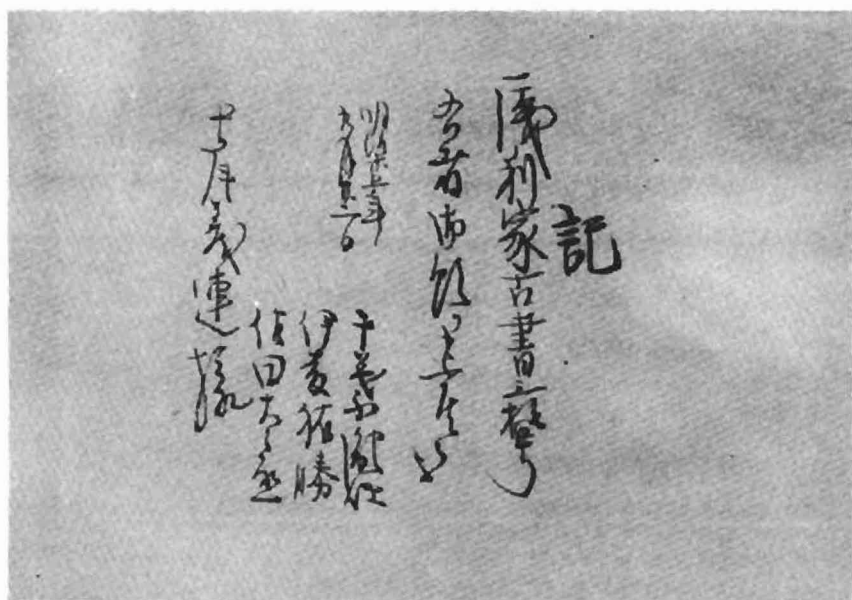
八月 日

(大之助) (和助) (祐勝)
佐田 千葉 乳井 伊藤

連名ニテ

※ 金貳円という多額の寄附をした長尾義連は、初代菊池九郎に次いで二代目弘前市長であった。

『弘前市史 明治・大正・昭和編』(昭四八・一一、名著出版)二一〇頁。『青森県人名大事典』(昭四四・四、東奥日報社)四四七頁参照。浅利家を通して発起人と長尾義連とは関係があったようである。また、この写真の資料に「浅利家古書三拾号」とあるように、浅利家古文書として整理されていた時期があったと思われる。



写真(4) 「記，一，浅利家古書三拾号，右者御預り申上候以上，
明治廿五年九月廿二日，千葉胤任，伊藤祐勝，佐田大之丞，
長尾義連様」